報告　5.29 金環日食ミーティングの報告

成田 直（川西市立北陵小学校）、渡部 義弥（大阪市立科学館）

1. はじめに

事の発端は昨年末のやりとりでした。成田と渡部の間で、社会教育分野と近畿支部が連携して近畿圏で本会の枠を超えた学校、社会教育施設、アマチュア、一般の方などに集まってもらって天文関連の社会事象についての意見交換をしようということになり、事例として、実用もかねて 2012 年の金環日食を取りあげることにしました。

このように、事の起こりが金環日食ではなく意見交換、そしてネットワーク作りだったので、後に知った 2012 年金環日食日本委員会と日程が接近することなど、調整不足な面もありました。

その後、話を進めていく中で今回は大々的にやるのではなく学校、社会教育施設、アマチュア、業者あたりからそれぞれお一人ずつ来ていただいて 4～5 人で意見交流ができるのをミニマムサクセスとして想定しました。しかし、本会メーリングリストや近畿の関係者に声をかけたところ、予想を上回る 30 名以上の参加申し込みが、しかも全国からあり、主催者としては嬉しい悲鳴を上げることになりました。

2. ミーティングの様子

はじめに、渡部からこのミーティングの開催経緯と趣旨の説明がありました。主な内容としては、2009 年の部分日食（大阪）の盛り上がりの様子から、このまま 2012 年の金環日食を迎えるといろいろと問題が出てくるのではないか？という問題提起を含んだものでした。問題というのは、一般の方も含めて、直前になって制御できない大きな盛り上がりになるのではないか？　多くの人に見てもらいたいが金環日食が起こるのは平日（しかも月曜日）の朝 7 時半頃。児童は登校前、社会人は通勤途中。さて、どうするか？といったものです。

渡部による基調講演

次に、大西さん（長野高専/ 2012 年金環日食日本委員会）から一週間前に東京理科大学で開かれた第 1 回金環日食シンポジウムの報告をしていただきました。今回の金環日食は日本人口の 65%が観察できる天体ショーという話題提供があり、そのぶん安全に観察するための情報発信が大切だという呼びかけがなされました。

報告をする大西さん

それらを受けて、参加者の皆さんからそれぞれが金環日食に向けて考えておられることを話していただきました。

半田さん（鹿児島大学）からは日本各地における日食の欠け方を同時中継しませんかという呼びかけが、福澄さん（日本公開天文台協会/日食観測学習連絡会）からは教員に向けた金環日食観察マニュアル作成の紹介と試用のお願いが、船越さん（ハートピア安八天文台）からは子ども向けの日食観察方法の紹介がありました。他にも、新妻さん（株式会社ビクセン）からは日食グラスを販売している立場から、保育所や幼稚園からの日食グラスに関する問い合わせが多いことなどを教えていただきました。

会場風景

さらに、

・「学校教員向けに観察方法の提案をしていきたい。」

丸川さん（伊丹市立こども文化科学館）

・「1 年後に向けて校庭のどこからなら観察が可能かすでに下見を済ませた。」

穂積さん（兵庫県立舞子高等学校）

・「一般の方へ広く告知したい。」

東山さん（朝日新聞科学医療グループ）

・「文系小学校教員に向けて講習会を開きたい。」

・「コルキットを太陽観察向けに応用する方法の紹介」

花岡さん（オルビイス㈱）

コルキットの応用例

※注！太陽を観察する際は接眼部内部にしぼりを入れる必要があります。詳しくはオルビイス㈱にお問い合わせください。

・「2009 年の反省を生かして 2012 年にできることを考えたい。」

吉田さん（読売新聞大阪本社企画事業部）

・「保護者の立場で小学校に当日の観察会を要請してきた。」

成瀬さん（大阪市立科学館友の会）

・「記事にしたい。面白い企画やアイデアを。」

川田さん（朝日新聞科学医療グループ）

といった発言がありました。

他にも、「まだ具体的には考えていないが、ぜひお手伝いしたい。」という声が複数聞かれました。

休憩を挟んだ後、先ほどの一人ひとりの考えや計画を受けて全体でディスカッションの時間を設けました。

再び大西さん（長野高専/ 2012 年金環日食日本委員会）から様々なレベルの人（研究者から一般の方まで）が見て、それぞれのニーズが満たせるような金環日食についてのポータルサイトを作り上げたいという宣言がなされました。例えば、「太陽を直接見てはいけない」という情報からもっと詳しく知りたい人のために「なぜ見てはいけないのか解説するページ」や、さらに知りたい人のために「眼

に悪いと言われる根拠となる論文を和訳して掲載するページ」まで辿っていけるような、そんな構想を話されました。

また渡部（大阪市立科学館）から、金環日食の起こる月曜日は休館日なので、例えば阪神競馬場を貸し切って観察会ができないだろうかという構想も話されました。ここで、社会教育施設で観察会を行わなかった場合の危険性について、新妻さん（株式会社ビクセン）から「1 つの館が観察会の実施を取り止めると近隣の館に参加者が集中して危険ではないか？」という指摘がありました。また、真貝さん（大阪工業大学）からは、「科学館などの社会教育施設には、観察会かそれに近いものが期待されていると思う。」というコメントがありました。

学校教員からは、希少な天文現象を子どもたちに見せたいのは山々だが、登校前という時刻的な問題や、観察対象が失明の恐れのある太陽であることなどから現実問題として学校で観察会を開催することは難しいという声が聞かれました。これに対するコメントとして、文部科学省や教育委員会などの上級組織から現場に観察がしやすくなるような通達があれば嬉しいという意見がありました。例えば、「2012 年 5 月 21 日は全国の学校で登校時刻を早めて学校で金環日食を観察すること」とか、逆に「始業時刻を遅くして金環日食を観察してから登校すること」などです。難題ですが、実効的な解決策を模索しないといけないという発言もありました。

3. おわりに

はじめに書いたように、もとは 4～5 人で意見交流ができればいいかと考えていたこのミーティングが、結果として 34 人もの参加者で行うことになりました。このことから、2012 年の金環日食の注目度を思い知ることとなりました。また、学生、大学、高校、中学校、小学校、教育センター、社会教育施設、天文関連業者、新聞社、科学館友の会、一般企業など様々な立場の方の参加があったことで、本当に様々な角度からの金環日食を知ることができました。同時に“動き出す人はもうとっくに動き出している”という焦りを感じられたのも収穫でした。

今回のミーティングは何か一つの答えを出すものではありません。参加者それぞれが交流し、感じたことをきっかけにして、2012 年 5 月 21 日の朝を迎える準備をしてくれればいいと思っています。実際に、ミーティング後にすぐに周囲への働きかけや取り組みを始めた方もおられるようです。また、当初の目的だった社会事象についての多角的な意見交換、ネットワーク作りも成功したと言っていいと思っています。様々な立場の方が参加してくださったことで私自身も新たなネットワークが広がりました。参加者のみなさんにとってもそうであったことを切に願います。

繰り返しになりますが、天文現象が多くの人の関心にあるということを忘れず、多くの人の参画を模索すべきとわかる会でした。

成田 直

渡部　義弥